

川柳論

鈴木重雅

一 川柳の有情滑稽

愚鈍とか、不作法などの、他人の欠点に対する笑いは、嘲笑で、そこには、彼我の対立があり、彼の欠点に対する優越感が、我にある。一見して、何の欠点もない、立派な人物を、裏面から観察して、意外な短所、弱点を発見し、これを摘発して、人に、己の機敏を誇示するのも、亦、彼我の対立があり、他を輕侮する気が、混って居る。鋭敏な理知の前に曝け出された裏面の醜態や矛盾は、滑稽であるが、温味は求むべくもない。が、笑には、左様に冷たいもののみでなく、暖い笑もある。釈尊が衆弟子の前で蓮華を拈提した時、誰もその意味が分らなかったが、迦葉だけは、その真意を悟得して、微笑したという。これは、温い笑である。固より滑稽に基く笑ではない。釈尊が、子弟の迷蒙を啓いてやろうという慈悲心に感銘し、かつ、その神秘を悟り得たという歓喜、謝徳の念が、この微笑となって現われたのであろう。師弟愛、真理愛の籠った微笑である。彼我の対立でなく、彼我一致の境である。春風に綻ぶ百花の笑である。これ程尊い笑は外にあるまい。川柳の世界にも、これに近い笑がある。

例えば、螢窓雪案幾年の後、代脈から、一人前の医者となり、始めは薬箱を持って供する黒鴨を連れて往診することの出来なかった者が、漸く、その願いの叶う身分になった。今日、始めて、黒鴨に薬箱を持たせて出かけた。さて年来気懸りになっていた黒鴨を従えて出る街頭での気分は、

黒鴨を初めて連れて振返り

薬箱初に持たせてふり返り

と、川柳子が写している。俳句の

刀指すとももつれたし今朝の春

正秀

という身の下侍が、槍のお供をつれて歩く身分になつのをよんだ川柳と同巢であるが、

槍持をはじめて連れて振返り

これらの句は、その出世した医者なり、武士なりの満足得意の心境を、尤もと同感している作者の気持が感ぜられる。共鳴している気持が分る。固より川柳のことであるから、微かな滑稽感はあるが、その医者、武士の態度を面憎いなど思っている様子は見えぬ。好意ある微笑を送っている様である。

鏡台や鏡を払い琴を買ひ

俄瞽女母は涙で無名圓

どつかぶつ度母の泣く俄瞽女

最愛の娘が、俄に失明して、もはや、鏡も鏡台も不要となったとき、この上は琴でも稽古させて、独身の一生を過

すに、他人の厄介をかけぬよう自活の道を講じてやらねばと、鏡や鏡台を売って、琴を買う事になった場合。俄盲目の娘の事とて、勘が鈍く、あちこち打つので、母は泣き乍ら、無名圓（打身薬）をつけてやるという場合。これらの場合、どこか滑稽気分があるにはあるが、それは隠微で、やはり同情が主となってこれらの句は出来ている。不具を嗤笑するような軽薄な気分はない。

藪入の中母親は盆で食ひ

藪入が帰ると母は膳で食ひ

母子二人だけの暮して、子は奉公に出ており、藪入で帰って来た時は、母の使う只一つの膳を子にまわし、母は通盆で食うという気の使い様である。母性愛といたただけでは尽せない様な深い、沁々としたものを感じさせられる。太祇の

藪入の寝るや一人の親の側

という佳章と同想である。川柳は川柳だけにそこに一抹の滑稽味があるにはあるが、暖い微笑を含んでいる。太祇の句は俳句だけに、「や」の切字があり、句に弛緩が無い。そして、前記の川柳と同様に、その光景を具体的に描写しているのみで、作者は、何の主観をも洩してはいないが、好ましいものとして見ていることは、脈々として感ぜられる。

寝所の相談をして餅を搗き

暮の餅粟はどうしてかうしてと

餅のむしろに、寝所を狭められるというので、その見当をつけたり、餅米にまぜる粟の相談をするというので、上流社会の光景の描写ではないが、それでも、好感を持った見方である。

今日限り屋根屋柳を解いて行き

屋根屋が、屋根の修繕をするのに、垂れかかる柳の枝が邪魔なので、柳の枝をくくっておいたのであるが、修理も終る今日、それをほどこいて行ったというに過ぎぬが、むざむざと柳の枝を折る様なこともせず、束ねておき、用が済めば解いて行くという屋根屋の態度のさりげない中にも、床しいところがあるのを、温いものと見ている様子がある。所謂可笑味という度からいうと、始めに出した例が高度であって、後の方ほど、稀薄になっている。稀薄ではあっても、ともかくもそれは、人事である、然るに、

烟草屋の障子に軽い引手窓

というような句は、人事に無関係とはいわぬが、障子についている引手窓の、いかにも、小じんまりしていて、かつ、軽々とした気分、淡い滑稽味を感じている。これに、売買という要素を混ぜると、

烟草屋の障子潜を明けて買ひ

となるが、人事が混っているだけに、滑稽味が少々加わって来る。しかし、作としては、前の方が宜い。

売溜に桜の交る玉子売

どつちでもお取りなさいと鮪売

気の迷さと取かへる鮪売

幾ら入り升と質屋はすらり抜き

寒念仏夫婦の中を寒むがらせ

寒念仏みりゝ／＼と歩くなり

庖丁を淋しく使ふ菓喰

さいづちで中を敲いて直をつける

こねどりは先をぬらしてさあといふ

はばたきをしてあんころの禮をいひ

かんざしであす咲く顔をを嫁かぞへ

葡萄を喰ひしまひ灰吹をすてる

草刈の子へのみやげはぎり／＼す

槍先へ蜻蛉のとまる長咄

見世物の衣紋つくるも哀れなり

和かに人を分けてく勝角力

二三番あとを見て立つ勝角力

足ばかり洗つて仕舞ふ関角力

軍配を上下で持つ御代となり

虫壳のむごつたらしいろうずが出

鳴子引子の愛想に一つひき

音頭取道陸神によりかかり

草市にうろたへてなくぎり／＼す

車座に硯をつかふ天の川

手拭ではたいて大工飯にする

据風呂に下女がゐるうち春と成り

いつかいい春に表は成つてゐる

大三十日とろつびようしに鐘を撞き

これらは、滑稽味を含んでいるとはいふものの、所謂滑稽ではない。相手に対して、揶揄するのでもなく、嘲笑するのでもない。その対象は、自己を対立させている様子はない。優越感も持っていない。侮蔑感もない。不合理、愚鈍、失態、矛盾を咎めだてしているのでない。その相手の立場になって見て、これは深厚な共感を寄せると共に、これを客観視するだけの余裕のある、自由な心境で吟じている。この種の滑稽を有情滑稽という。故に、この滑稽は、小さい「我」をたてる者にはない。我執を捨て、利害得失の境を離れ、たとえ一時たりとも、明鏡止水の心境に還らなければ、味えぬところのものである。これは、これを聞く他人がいよいよといまいと、何のかわりもない。悪どくない、淡々とした、水のような味であるが、その味のないところに、汲みたての岩清水のような旨味が

ある。稚気の滑稽、有情滑稽以外の洒落や滑稽は、外から味をつけたジュースみたいなものである。それまででないにしても、メロンみたような味である。有情滑稽は、これに対していえば、西瓜の味である。メロンの味は、あまりにも、人為が加わり過ぎて、温室ものの味がする。不自然味がある。西瓜の味は野性の味であり、自然の味である。一層の新鮮味がある。それ自身、先天的に根ざした味である。ジュースや、その他の人造飲料、その場限りのもので、飲むにしても限度がある。やがて飽きが来るが、これは、米の飯と同様飽くことがない。

前の例に見ても分る様に、親子の情、出世した医者 of 気持、無心の動作に潜む滑稽気分というような、普遍的、不易的な情感は、沁々とこれらの匂に横溢している。その根底は、己を虚しくして、利害得失の世界から離脱したものの、即ち、大なる愛に根ざしているということになる。ここまで来ると、そうした心境というものは、畢竟、俳味と通うところがある。芭蕉が、

子に飽くと申す人には花もなし

と吟したところを見ても、あれ程、自然美に傾倒しながら、その根底には、人に対する深遠な愛を湛えていたことが分る。人に対する愛に燃えているものにして、初めて、人以外の無心の自然を愛することが出来るのである。

花にうき世我が酒白く飯黒し

芭蕉

世人は、浅草、上野の花に浮かれているが、自分は、濁酒や色の黒い飯を頂いて、それで結構満足している。口腹の欲に心を奪われる様なことがないのであるから、感謝がある。これが芭蕉の心境である。芭蕉言う。

笠は長途の雨にはほころび、紙衣はとまりくのあらしにもめたり。侘つくしたる人我さへあはれにおぼ

えける。むかし狂歌の才士此国にたどりし事を不図おもひ出で申侍る。(冬の日)

これは風雨に揉まれたわが旅姿の哀れなるを見ての感想である。櫛風沐雨、風餐露宿の生活を悲むどころか、怡然として楽しんでゐる。さればこそ、その縊縷を纏うた行脚姿に連関して思い起さるる人には、失意の古人もあるべきに、それには想到せず、飄逸なる竹斎を思い起して、

狂句木枯の身は竹斎に似たるかな

と、微笑をさえ浮べている。これは、自嘲というには、余りにもあたたか味がある。更に、雨漏りの草庵に坐して

芭蕉野分して鹽に雨を聞く夜かな

と、陋巷に在って、その楽を改めざる風格を示している。

かくの如く、衣・食・住の三方面に互る不自由の生活に、何の不満も感じていないのは、生活上の物欲が無いからであるが、それどころでなく、

野ざらしを心に風のしむ身かな

死にもせぬ旅寝の果てよ秋の暮

とある様に、最も惜むべき命さえも捨てているのであるから、衣食住の不満は、毛頭無い筈である。これ以上の「捨身無常の観念」(奥の細道)は無い筈である。これあるからには何の我執も執着もなく、所謂、随処為主で、何処に在ってか楽まざらんである。小なる自己を捨てれば、そこに大なる自由が得られ、樹下石上、到るところ、こ

れわが家となるべく、悪衣悪食も錦繡膏粱の美と観ぜられ、かの一茶が、土地も家もあり、富籤さえも買う身分でありながら乞食の統領と自嘲し、

ひいき目に見てさへ寒いそぶり哉

と眩き、折角、衣更をしながらも、

下谷一番の顔して衣更

と苦笑し、自然の清風に対しても、

涼風もまがりくねつて来りけり

と洗面をつくるという様なことは、決して無かった。かの川柳子が、

御草鞋はかう召すものと涙ぐみ

といったのは、御家没落の若様に仕える下僕（或は乳母）の境涯に、万斛の同情を寄せて居る趣が見えるのである。また、

蜻蛉は飛びさうにしてよしにする

も、風景の描写であるが、無心の蜻蛉を、人に擬しているところに川柳味がある。ここに軽い滑稽味があるが、それは、素材の取扱い方見方味い方の上のことで、心無く看過すれば、看過せらるべき蜻蛉に、関心を持つのは、利害得失の上からではなく、美的良心の上からであり、美的良心は、畢竟、愛の中から発生するものである。子に飽くと申す人には花もなしというのは、それである。故に、ここまで来れば、川柳と俳句とは、その神髓に於て、何

等かわるところはない。一枚の紙の表と裏であり、一にして二、二にして一というべきであろう。

士農工商の差別こそあれ、それは、結局、人の子なる点に於て、変りはない。教養境遇の如何により、その心境に千里の差は生ずるが、さて時あつてか、胸臆の琴線に触るれば、微妙にして、縹緲たる神韻を發するのである。たとえ、一文不通の野人であっても、その対象に没入した瞬間は、神の心になってるのである。博学多識、三業に惑乱せられる読書人では、その夾雑物のために、却つて純真な氣持になれぬことが多い。

董つめばちひさき春のころかな

晚台

董という、可憐な、小さな花、それを摘んだ瞬間、わが心は、その小さい花に吸い込まれてしまふのである。一体に、芭蕉の作品には、例えば古池の句にしても、駘蕩たる春風が吹き渡っている。温藉の氣が横溢している。洒脱の味が、浸透している。微笑が浮んでいる。それは、その人格・心境から滲み出て来る氣分で、所謂ユーモアである。小手先の器用によるものでない。二千人の門人が子の如く来り、その教を聴くことを喜んだのも、深い由来がある。そのユーモアは、行住坐臥、四六時中、間断なく、その人格の中より發露し来たつたものである。川柳の方のユーモアは、必ずしもそうは行かないかも知れない。が、しかし、川柳の作家は、大部分、その名が明かでないで、その点が確言できないという丈のことである。旗下の隠居や、町人の吐く句にすぎない川柳に、何程の事かあらんと思われるかも知れないが、徒然草に、

心なしと見ゆる者も、よき一言は云ふ者なり。或荒夷のおそろしげなるが、傍の対ひて、「御子は在すや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「さては、物のあはれは知り給はじ。情無き御心に

ぞ物し給ふらむと、いと怖ろし。子故にこそ、萬のあはれは思ひ知らるれ」と言ひたりし、さもありぬべきことなり。恩愛の道ならでは、斯る者の心に慈悲ありなむや。教養の心無き者も、子持ちてこそ、親の志は思ひ知るなれ。世を捨てたる人のするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづに諛ひ、望深きを見て、無下に思ひくたすは、僻事なり。其の人の心になりて思へば、まことに悲しからむ。親の為、妻子の為には、恥をも忘れ、盗もしつべき事なり。

とあるが、この荒夷は、京都に来ていたアイヌであると、喜田貞吉博士の説であるが、アイヌにして、この言ありましてや、文化の進んだ江戸の人々(その内には、武士を多分に含んでいる)の川柳に、「よき一言」あるは、当然である。「なべてほだし多かる人の、よろづに諛ひ、望深きを見て、無下に思ひくたす」態度の川柳も、相当多いが、「其の人の心になりて思へば、まことに悲しからむ」と、其の人の心になって吟じた川柳に至っては、「よき一言」たるを失わぬ。有情滑稽の句がそれである。これ以外の句は、或は奇警、或は峻烈、見て快いものではあるが、この種の句は、淡泊軽洒で、さりげないものながら、玩味すれば、その深刻味に於て、芭蕉に迫り、人生歌人憶良の墨を摩し、踵を近松、西鶴に接する底のものもあるのである。川柳の真価は、これに至って極まるというべきであらう。

待つ顔へ桜折々散りかかり

などは、情景並び到るものといふべきである。これに似た俳句、

人恋し灯ともし頃を桜ちる

白雄

両者の情景、頗る似ているが、似ていないのは、表現の点である。

二 川柳の表現

和歌の用語は和語を主とするので、「勅なればいともかしこし鶯のやどはとはばいかが答へむ」の「勅」などは異例である。古風の俳諧は、俳言の使用を必須としたし、芭蕉は俗談平話を正すという態度をとっていた。これは、俗談平話そのまま無条件に使って宜いというのではなく、「正す」ということが、大切な条件に涼っていて、例えば、

飯あふぐ噂が馳走や夕涼み

における下品な「噂」という語は俗語であるが、この場合は、大津附近の田舎家での馳走を受けた時のことであるので、その身分から言って、「妻」では不適當だから、「噂」と言ったのである。芭蕉が、

白菊の目にたてゝ見る塵もなし

と敬服していた園女などに対しては、「噂」は勿論当らない。その人や物に対して、他語に代えることの出来ない、動かぬ語を使用することを、芭蕉は提唱した。これは、いかにも穩当な意見であるが、芭蕉は、其角が、

白いものが降ります垣根かな

と吟したのを喜ばなかった位で、芭蕉の句は大体として口語調よりは文語調に傾いていたのであった。かく、それぞれの文学には、用語に多少の規制があるのは、古来の風であるが、川柳の用語には、別に規制は無い。自由であ

る。大体、口語俗語を基調としているものの、ある場合、文語、漢語、仏語、洋語が、ある情景なり、気分なりを最もよく表現するというのであれば、自由に、それらを用いている。口語俗語は、叙述に用いて、

下女がまへいわつた上にまくつて見

女湯へおもひなしやらねばるやう

若夫婦つまんで見たりなにかする

という風であるが、句中の会話に、適切に使用されて、その人物の身分、年齢、職業、性質、心理などを活写している。

御湯殿で「そちも這入れ」とおじやらつき

菖蒲革「四手の垂レを上げおらう」

「吹附けてくりヤ」と帽子を直してゐ

「何をいやつた」と車とつかまへ

「声を立てやす」と腰元いけぬ也

「御隠居をなされ」と口をへの字形

「先づ御入りあられませう」と江戸家老

「大口をきゝやすぞへ」とおちやつびる

下女か宿「五ツ月だけに御座ります」

「守にこそあげましたれ」と宿はいひ

「させたならさせたといへ」と宿はいふ

「もしきやふがちがいやした」とかこひいふ

「寝入ラれざござれ」とそつと耳に口

まくら絵をろくに見もせて「けしからや」

たかのぎう「あなた御式文たりませぬ」

「ちよつくと来てくんなよ」とろじでいい

「床コげいしやめ」とおく様ハ気になされ

後の月「再応の儀」と親仁いひ

意見する側から「『あい』とまづいひな」

「こゝをよう聞きや」と娘をやりたがり

「のきなさい付木ばかりくべなざる」

「ふぐ汁もくはさらにやあ」と姑いひ

「相対でかくしやるずろ」と御新造

ひなまつり「旦那どこぞへゆきなさい」

「来たさうだうなりなさい」と大晦日

「つきあひを御存知ない」と母に言ひ

正燈寺聳「いえどうもいえどうも」

「御手をひき申せ」と石田世話をやき

「必ず庫裡へ出やるな」と和尚いひ

「棒組やおよらぬ内に願やれな」

「困つたぢや身共熊の胆持参せぬ」

「姉さんがけふは芝居へ灸すゑに」

「がん鍋とやらへお遣られなんしたと」

「わごれめは何ぞ」と浅黄大口説

いやなきみ「なべめが宿で御座ります」

「サアそれはサアくくく」の大晦日

せき将棊「さきにくらつてしまひをれ」

「こゝにけつかる」と見てゆく松が岡

大名の好色、武士の威丈高、御守殿の見識、国家老の骨硬、江戸家老の便佞、下女の生活、上品な奥方の嫉妬、父の木強、母の取りなし、姑婆の意地悪、喜怒哀楽の情に従って変る言葉、口吻態度などが、躍動して、甚だ有効である。更に、関東語、上方語を使ひかけたのでは、

「ありつて行くはおらやだ」と村の嫁

「ちつとべい瘰癧痕はあるが」と村中人

「しり頭べえ磨いて」と村姑

羅生門綱「おれが行くべい」といひ

雪の晩「鯁だんべい」と藪医おき

「抜き所が悪るいサカイ」と公家衆い

「人蔘は行長殿に見てもらや」

とつともう根岸は京の岡崎ぢや

花さそう嵐の山へおいでんか

初ぢやさかいと棧橋で反吐をつき

ちよぎ舟はだんないものと江戸馴れる

ようしをるさかいと手代はまるなり

彌宜町の踊ヤツチャくほめ

同じく俗語であっても、これによって、男女、大人、小人、境遇、前身を暗示するものもある。

御酒機嫌より見苦しいさ、機嫌

へよりも気の毒なおならなり

御飯よりまんまの膳を先へ出し

おまはんとわたいで内が治まらず

め、つこを御ちんこなとゝ二位のあま

山の宿あゝつがもねへ場所となり

俳諧の切字「や」で、俳人を匂わせることもある。

『初雁や』などゝおひえをどうなさる」

「おひえ」は綿入。向寒の折柄、呑気に句作をしている俳人の妻が氣を揉む光景。

また、上古語、中古語、雅語を使用して、卑俗なことを滑稽化しては、

親分の腕に無銘はなかりけり

女帝は九十六ひだでおわします

霜月の恥しい日となりにけり

浅ぎうらねぎられるだけねぎるなり

まぐばいをしやうとぬれる神道者

持参金いとやんごとのあるのなり

いせの留主うまし男があつてゐる

道鏡は人間にてはよもあらず

いゝなつけいつの頃にやちぎりけん

九重に尾をふり廻し逃去んぬ

「女帝」に「おはします」は当然である半面、中七との対照が滑稽、「なりにけり」は、かねてよりの待望の、婚礼の当日になるまでの時の流れの気分をよく示しているし、「やんごとの」の古語が、かくしごとの義を婉曲に伝えているのみでなく、「持参金」と対比されて、愈々滑稽に聞え、「ちぎりけん」の語は、そのいいなづけの、おとなしそうな人柄が活躍しているし、終りの句の「逃去んぬ」なる記録風の語は、玉藻前という伝説に対して妥貼でもあるなど、それぞれ有効に使用されている。漢語では、

まくらゑハけだしそうしのいしよにして

小人に店を追はれる素読の師

御不如意は社稷の臣がまぎを割り

御不幸のあとを腰元併吞し

暫の価千金周の春

夕立のたんびに仁者貸し無くし

羊頭を掛けて狗肉の宮芝居

生酔を家内中出て落手する

此雪に豈女房を用ゐんや

素読など不可なりとして息子行き

其間御宰よぎなく周茂叔

平俗なことを、真面目に取り做して、滑稽味を横溢せしめて居る。仏語では、

三界無安のはずだのに二世帯

葷酒山門に入らず袖に入れ

山門に入らず裏門から運び

天蓋を和尚むしや／＼破却する

一向構はず台所へ骨を捨て

美しい後家方丈の室に入り

大黒の里で羅睺羅を育てさせ

こつそりと所化の葬る魚の骨

た。仏語の硬固莊重なのに対して、内容が反対なので、ちぐはぐなのが面白いのである。必要とあれば、外国語も使った。

平六がとこずぼうとうよくうれる

持参金ウニコールまでのんだつら

御不勝手シヤボンのやうな玉が落ち

顔赤くなるとふらそこ青く成り

ふらそこを入れたで息子内にあず

びいどろをつるすに仕度金を出し

ビイドロを二杯あほつて嫁はひき

ヲットセイ転ばぬ為の薬の名

知盛をしやぼんの様に祈りけし

めりやすは女の愚痴に節をつけ

きな／＼と蘭医もしやれる柳橋

紅毛の家鴨爪先ねらうなり

水鉢の中でこつぶの立およぎ

傾城にふくりんかけた御奉公

かぼちちやどろぼう雪隠を引きたをし

源左衛門さぼてんなどはとうに売り

白魚のてんぶらメリヤスをはめた美女

いさぎよく乗出すやつはみいら取

間男と亭主あんぼんたんで呑み

擬外国語もある。

馬鹿らしうアリンス国の面白さ

ありんすの国化物のすむところ

太鼓持アリンス国の通辞也

アリンス国へとはれと息子成り

女悦丸蛮語一名スルトイク

ヨクイキヤスは四ツ目屋の符牒なり

腎の臟蘭語でいへばスルトヘル

終の句は、腎虚と併せ考えれば分る様に、イキムトヘーデルの類。戯語。

次に、「面白さ」の如き表現も、川柳に多い。

さかさまなやげんで杭の打ちにくさ

白くなり赤くなりする恥しさ

さし引のこり二人り寝るはづかしさ

花嫁の不粹でないの憎らしさ

よくもめた嫁は紙衣に柔かさ

仲人もひらきかれこれするこわざ

乳の下で屁の音トのするおもしろさ

小便に夫婦で起キるにくらしさ

にぎられた片手でしたむ美しさ

もう半んだ／＼と御菜いらひどさ

永カの留守ふ自由をせぬにくらしさ

まくら絵をじやうだんに見るありがたさ

右に句の下五の「……さ」は、説明に墮した様であるが、川柳では直截明快を貴ぶ面もあるので、婉曲に表現するのと同様に、これまた有効である。

形容詞の語根に「さ」をつけて名詞にしたのは、通例の用法であるが、川柳では、「孝行さ」「本望さ」の如く名詞に「さ」をつける場合が多いが、この破格な用法も、辛味が鋭い。

股引で死水をとる本望さ

丸縮を始めた人のはつめいさ

孝行さ豆腐にあきた顔もせず

甲子を祭るで寺の貧乏さ

外科の子の本道になる臆病さ

孝行さ柄杓の立たぬ飯を焚き

しめなわを見い／＼とく不届きさ

死水を嫁にとられる残念さ

「なり」「也」を以て結ぶのも、川柳独特のもので、文語のなり、漢字の也、共に本来固い語であるが、川柳に用いられると、俄然として硬軟両用の妙がある。

迷ふまいものか持参と裸也

強飯に塩のないのはあはれ也

とろふりとねれたを女房みやけなり

牡丹餅で思出すのは他人なり

一七日持仏くひものだらけ也

入りを見合はせ調合にかゝる也

軍は無いと見切つたで貸さぬ也

焼継屋南無三宝の恵なり

十六に成ルとぶんぶく茶がまなり

けいせいも毛ぬきハ一チの道具なり

しやう天をくづしに来ルか遣り手なり

しんそうほうつゝで紙を遣ふなり

出合茶や二つにわかれてかへるなり

これらの「なり」は、指定と咏嘆をかねている。俳句でいえば、「哉」に当るであろうが、「哉」に改めて見ると、全く感じが違つてしまつて、洒落な味が湧かず、索寞たるものになる。

句尾を動詞、助動詞、形容詞の連用形で結ぶのも、川柳の一特色である。

くまの皮見て女房のぎりをいゝ

あと釜が出来ると兄は飯を食ひ

その昔シほしがりし毛に斧が入り

はづかしさ富士の裾野が広くなり

芝居から帰ルとつまみ洗をし

紙舟をそつと娘へ立テに見せ

首尾をしたのハこま下駄の音トで知レ

持参金座つたところは美しき

はりいよくがまんして手をやらずに居

小便の時もゝ引へ首を出し

嫁入りハこうだと本やそつと見せ

折り／＼は遠道させてあじをつけ

連用形は、言いさして中止した形であるので、後に余情を残す気味を帯びている。齒切れが悪い代りに、綿々として余誤を残すところが靨いである。未了語としては、助詞「て」も使われた。

長局高ひ物ともいわすして

若後家のくわでんへくつを入れられて

生貝の目きゝへくじる手つきにて

未了語で結ぶのは、俳句に於て、

若楓一ふりふつて日が照て

来山

商人の浜より浜に荷を持って

宵月やくもらぬ梅に小雨して

秋たつやはじかみ漬もすみきつて

松の月枝にかけたりはづしたり

出ずと可い蜥蜴や人を驚かし

来山や鬼貫等の上方の口語調俳人には、この例が多いが、一般俳人には、この例は少ない。少ないということは、言わず語らずの間に、俳句に於ては内容に妥貼せず、そぐわないので、自然に用いられていないということを示すのである。緊勁を旨とする俳句に在っては、適当でない。ダラリとした川柳に於ては、よいのである。一茶の句、
閑人や蚊が出た〜とふれあるく

これは内容は、川柳的であるが、終止形結なので、川柳たることを免れている。切字がある上、もし、「ふれあるき」と改めれば、立派な川柳になる。連用形結は、実に川柳の特色である。川柳は、一方では、終止形で結ぶ場合もないのではなく、

仲条ハぐつとまくらつしやれといふ

気がいのふんどしきらひこまらせる

うりものをいじるて浅きふられたり

長つほね気よわな大工いやといふ

小侍御乳母とのゝを見たといふ

道鏡ハしとねの上へてめしに付

しこたまにからしを喰て見なといふ

門のむだ書キ間男がふいて居る

前銭でなけれハ下女はがてんせず

すぎな下女だれときまつた者も無シ

藪入ハ本望とげた顔もせず

宿下り死身に成ツて茶やを出ル

旦那寺食はせておいてさてといふ(ひ)

終の句などは、下五が両様に伝えられているが、この二つの場合を比較して見ると、両方とも軽重が無い様に感ぜられる。連用形には連用形の味があり、終止形には終止形の味があつて両立しているのは不思議である。「こまらせる」「つけられる」「がてんせず」は、連用形が使いにくいから終止形にしている。「無シ」は、「無キ」では文語調になるし、「無イ」では弱いので、「無ジ」に決定したのか。一々の語の語感によって決定した様に見える。

次に、川柳子が工夫した新造語も、よく使われる。原語を翻案したものが多い。子思いの親を、「夜の鶴」というところから

母親が昼の鶴ゆゑ泣く娘

というが如くで、皮肉に響く。

鼻づくで来やれとりきむ象仲間

金はない筈ひんなりとした男

義貞の兜顔世が鼻きゝし

箱入の男と云ふは新五郎

聾小言威言低にてそつと言ひ

づぶ三の頃が酒盛おもしろし

懐手ふところ足で亀昼寝

申子の跡で年々申さず子

姑死に娘は力をひらふ也

息子もう二人遊びに母こまり

附け馬の油断は離れ客離れ客

家の脉引いて人蔘もりたがり

毛巾着この毛に付て大わらい

この振りを、人名に応用した奇警な擬名が多く出来た。

要するに、用語は、その新古俚雅に係らず、俗談平話を、適切な場所に用いれば、虎に翼して野に放つが如く、縦横無尽の活躍をするもので、

十九年娘を持つた夢を見る

しづむ時念仏のうく風呂の中

耳の穴入物にして嫁くらし

生酔を巻き附けて来る下戸の首

居候洗濯をした飯をくひ

姑婆死にさうにしてよしにする

内談と見えて火鉢へ顔をくべ

をかしいと嫁手の甲をかじる也

すねた子を壁からやつとひつべがし

夜ふけてハ内義随分ころし泣キ

うしみつにきみ能女房うなされる

野暮娘始皇帝程ふりはなし

句法について見るに、俳句が十七音の短詩形なるため、頻に、省略法を用いている如く川柳も同様で、「番頭とくさつて居ルて内かもめ」には、家付の娘（又は、後家）なる主語が省略され、「壇の浦能州出やと笏でつきには」能州を」なる客語を省略されている。その例は多いのであるが、省略の部分は、大抵分る様になっている。この様な例は至るところで見られるから省くとして、猶、この外に、

花嫁はその夜いふべきことばなし

その後藤戸で道とへば知りません

その手代その下女つひに九尺店

そのあした仁田の小屋はねぎだらけ

夜なべする顔で御針ハかのを待ち

トハイへどくじつたと見え腕を産み

などの「その」「かの」「ト」は、巧妙な省略法で、数十字の説明を必要とするものであるが、川柳では、即座に

了解される。

俳句は、大抵、二句一章の形式より成り、省略法も、頻繁に用いられているが、川柳も、

極にくし時平梶原蚤鳥

近江のはぜゝ大江戸はかねの城

吊の押鹽と松右衛門

松右衛門の捕方与力岡つ引

ろうがいの薬りががんこうかゝいれい

其時の蒸籠島屋沓岐之椽

岩戸ロピカリ世界の烏ガア

妾仏遊女に菩薩下女如来

紫裾農残雪のつくば山

角大師鳥羽絵の相撲土俵入

油断大敵泰平に鎧の利

有難さ御庭一杯江戸の町

浮舟の左右松風椎が本

の如く、助詞を僅に用いたのみで、殆んど、名詞を並列したものもあり、また、名詞のみの句もあること、俳句と

同様である。

手ぬぐひ屋薪屋光明様御用

節句前藪蚊十四二十匹

流行医者乗物訴訟二三人

角大師天窓鍛形足毛沓

面頬鍛形武者草鞋角大師

樽拾上田一束弘物

松右衛門神祇釈教恋無常

同じく名詞句でも、「奈良七重七堂伽藍八重桜」は、勾調が緊勁であるが、名詞句の川柳は、思ひなしか、弛緩している様に感ぜられる。一茶の

大菊や今度長崎からなどゝ

は、切字がきいて。内容は川柳的であるが、矢張、俳句である。川柳には切字も無く、声調に意を用いず、破調が多く、だらりとしている。

雑煮どころか御用心々々々

また、俳句にも長発句というのがある様に、前句附にも、長いのがある。母袋未知庵氏によれば、

(前句) 成ほどさうじゃ〜成ほど

小便に起とぼんなうがおこります御寺様何といたしましよ茶を呑しやんな(俳諧うばざくら)
尚、新しいものながら、

竜は鱗際の虫に苦む金持寝つかれず

兜も鎧もなツちもいらぬサツサ持てけ背負ッてけ開化の代

などの極端なものもある。こうなると、新傾向、自由型俳句と何等拵ぶところがなく、川柳の領域から逸脱したものである。一定の外は無い。一定の土俵内での力競べであればこそ相撲である。土俵を用いぬ力競べは、もはや相撲ではない。正統なる川柳としては、矢張、平句の五七五調を守ることが望ましい。

三 川柳の修辭

概して言えば、自然は単純で、人事は複雑である。俳句の題材、内容は自然に傾き、川柳は人事に傾く。従って複雑な内容を如実に描写せんがため、川柳には色々な修辭法を用いて、その効果を發揮せんことを力めたのである。

永々と川一筋や雪の原

雪の曠野は白皚々、唯見る黒一線。即ち、川である。広大なる風景であるが、至極単純である。

小言いふうちになくなる春の雪

この川柳は、春の雪は消え易いというだけのことと単純の様であるがそこに人が入って来て、春になっているのに寒い雪がと、愚痴をこぼすという人事を含んでいるので、それだけ複雑である。川柳における修辭法は、多様であ

るが、総じて川柳子は、明喩法を用いることが多い。見立が奇警で、辛辣である。これは、そのものの形状、性質、情味を精細正確に観察した結果なのである。疎漏な見方ではいぬぬものである。

花嫁は飯をかぞへるやうに食ひ

色直し雪をふるつた花のやう

呉服屋の手代疊に生えたやう

暗喩法。

雑巾の白いを親仁はいて居る

折檻にまあくくと蓋になり

諷喩法。「姑の日向ぼっこは内を向き」は、嫁の動静を監視する姑婆の意地悪を、「銀煙管銀の様だと親仁いひ」

は、親仁の迂濶を諷しているが、これは、川柳全般に互る通性であるから、例は省く。

換喩法。

店賃でいひこめられる論語よみ

鯛丸ひっこ抜いてる二合半

引喩法。古語故事を、句中に折り込んだもの。

晝のことはしはきを後と毛延寿

過つては々からず来るふてえやつ

人の性は善なりもし何かおちました

時は今天が下なる初齋

よしや君などゝ西行理づめなり

田舎医者使は来たり馬に鞍

引用法。引用の典拠を示すもの。

きさごでも仲尼はよせと曰はく

子曰くけだしは人を迷はせる

字喩法。字形に基くもの。

妙の字の偏にはまつたどら和尚

里の茅に浅黄は成つて待ち

声喩法。擬声語を活用するもので、適切に使えば、著効を収めることが出来る。

ずぶくくくと秀郷は客に行き

あれはもと乳母のずるくべつたりさ

かみなりのぶらく病ごろく寝

孝の徳勅使の供はよろくし

耳こすり鸚鵡きよろくくくし

花嫁の夜着はすはくうごく成り

コロはてなりんはあシャンこむだわい

仲国が小督の局の所在を、琴の音で知る光景で、音をしるべに、漸次、その菴に近づく様子がよく現われている。

詞喩法。枕詞、序詞、掛語、縁語の内、前者は殆んど用いられず、後二者は、川柳の初期から、ぼつ／＼出て来、天保期に於て激増した。

呑み過ぎた暈の酔は梅雨に出る

白酒で夕焼のする富士額

山伏を初手はとがくしく咎め

暈語法。同一の語を繰返して、語調を円滑にする手法は、川柳でも屢々試みられた。

あの御子のお子ももう早この御子か

いう事を聞いていふ事下女聞かず

足で足かく立聞の足と足

擬人法。

対照法。

二上りがすぎて身代三下り

よくいへば悪くいはれる後家の髪

吉原が明るくなると内は暗

歳旦はしたが歳暮はむつかしい

新世帯和らかく出来こはく出来

一生にたつた一朝おもはゆき

曲言法。率直に言わずして、読者をして、一考せしめるもの。

この家で生れた女房まけてゐず

川崎へ詣る陰間はもういけず

田舎医者土間の塞がる礼を受け

歳暮には酒に用ゐる物を呉れ

惚れ薬佐渡から出るがいつちぎゝ

よごれめの知れない猫を抱いてすゑ

息子の労咳白い猫がよし

生きてゐる土左衛門小豆ばかりくひ

一目ほか見られぬ嫁を暮によび

頓降法。

納めると人の逃出す、居合抜

稻麻竹葦とかこませて・辻講師

罽元をくつろげてゐる・菓売

柄に手をかけねめ廻はすと・齒磨

劔戟をふつて・菓をうりつける

満足な子で悔んでる・馬鹿山師

互に拳を握り合ひ・幾つある

あの大仏様御らうじたか・銭となり

雨戸に合栓あひくろろ・焼餅

粗豆をつらね・四人詰一分なり

言葉たゝかひ事終り・火吹竹

楽みに手の皮をむく・ひぜんかき

毎夜出て人をつかんで食ふ・按摩

さり状をかくと入聲・おん出され

生き替り死に替り出る・下手役者

断句法。急激な進行変化を簡潔な句法で示すもの。

取る投げる摺り出す売れる勝負附

吹く敵くひつかく鳴らす大法事

勝つ請ける負ける又遣る流す買ふ

書いたり揉んだり消したり噛んだり暮の文

誇張法。白髪三千丈とか、銀河九天より落つという様に、適当に誇張すると、印象を深く与えるのに有効であるが、過度になると、滑稽になる。川柳子は、ここを考えて、滑稽化を覗う。この過度の誇張は、主観的滑稽を主とするものばかりでなく、川柳全般に用いられている。

くまんばちくらひ道鏡いたくなし

一ト所衣通姫も御こまり

かの娘来たので湯やがわれるやう

道ぎやうハ長命丸をはけてぬり

下女か恋夜だのひるだのしや別ツ無シ

むくくとおごを盛たるごとく也

馬かたハおさくまけぬものを出し

道鏡ハ居ルとひざが三ツ出来

小便に都落ほど立つ棧敷

橋杭のやうにゆり込む切落

大当り遅いとおつべしよつて入れ

子を抱いて総身のすくむ角力取

関取が立つと涼しい風が吹き

馬の程有てうちんを駕へつけ

たびかへりその夜油と水のよふ

結 論

川柳は、主として、江戸の町人社会、有識社会より出た文学である。大部分は、不幸にして、作者の名を逸している為めに、作者の個人的傾向を知ることが難しい。名が分つても、川柳が、型の描写に終始しているために、個性の甚しい相違を発見することは難しいかも知れない。人情世相という点に於ては、親子、夫婦、親族、主従、朋友、男女の關係を尽し、年齢に於ては、幼齡より、老年に至るまで、身分に於ては、上は將軍家より下は非人に至るまで、職業に於ては、士農工商より、商売往来にないものに至るまで及び、年代は、江戸中期より末期に至るまで場所、江戸を中心とするも、若干は地方に關係しているから、江戸時代の社会相は、多角的に、投写せられているといつて宜い。但し、何事も江戸を中心とすることであるから、題材は比較的狭小で、單調なるを免れない。かつ、江戸っ子平素の豪語に似もやらず、攻撃が、常に、弱者に向いがちであったことは、感心出来ない。男性の描写よりも女性に、女性といつても、遊女下女、娘、嫁、持參嫁、特に母、姑に傾き、男性といへば、武士よりも町

人に、町人といっても、町家の親父、息子、別して遊蕩息子に傾き、遊女の手管、下女の好色、娘の労咳、嫁の羞恥、持参嫁の醜貌、母の甘き、姑の意地悪、親父の頑固、息子の放蕩という様に、始めは活潑な描写であったものが、警拔斬新を誇るに馳せて、あらゆる場合を曲尽し、遂に一の型を生じ、生気を失い、やがては描写を離れて、観念の遊戯に落ち、駄洒落に帰して、新鮮味が無くなり、沈滞の色が濃くなったがこれは、ひとり、川柳のみのこととてなく、他種の文学も同様で、天保期の沈衰時代に入ったのである。内容は、卑俗浅近で、動もすれば、猥雑に流れたのであるが、これは、作者が作者であるから、当然のことで、欠点といえはいえるかも知れないが、これが、その特色なのであって、もし、川柳が上品なものになったら、もはや、大衆文学ではなくなるのである。

表現は、江戸っ子の特徴として、とかく、誇張に失したのであるが、他種の文学に就いて観察すれば、これも江戸っ子独特のものなることが分るのであって、その法外な誇張と覚しきものの中に、江戸っ子が躍動している姿を看取しなくてはならない。又、修辭が駄洒落に流れ易かったことも、その欠点の一つである。これも江戸っ子の特色の一つであった。要するに、題材、内容、表現、修辭に関する弊は、四世川柳以後の狂句時代に入ってから顯著となり、川柳の本質から離脱しかかって来た。思うに川柳は、狂歌、狂文、黄表紙、洒落本、滑稽本とともに、太平なる江戸時代の時勢より生れ出た滑稽文学であって、輕妙洒脱を以て、本領とするものであり、庶民の日常生活、經濟、宗教、信仰、風俗、言語の研究資料としても、亦、貴ぶべきものである。

今を知らんと欲すれば、往に溯らねばならず、来を知らんと欲すれば、今を探らねばならぬ。上述したところは、既往の足迹であるが、以上の考察よりして、当来川柳は、如何にあるべきであろうかということとは、更に、一考

すべき問題である。言葉の駄洒落にはじまって有情滑稽にいたる六段階を通して見れば、洒落、滑稽、諷刺、愛の四方面に分れる。この四方面が、過去二百年間に進み来た方向である以上、愈々この特色を発揮する様に推進しなくてはなるまい。そのためには、透徹せる頭脳を持ち、俊敏なる観察によって、複雑なる社会相の実態を看取せねばならぬ。然らざれば、得るところの作品は、生ぬるい、気の抜けたものになるう。併し、唯単に冷徹な観察の結果は、徒に彼我对立の洒落、滑稽、諷刺を求むるに終るであらう。恰も、人が、他人の子を叱ると一般である。一道の冷感がつきまとう。従って、声を大にすればするほど、人の反感を招く。恰も、己の子を叱る態度に帰らなくてはならぬ。己が子を叱る言葉は、荒くとも、そこには深き愛がある。仁者敵なし。いかに頑固な子でもその愛にとけ、その教に服するのである。洒落、滑稽、諷刺も尖鋭なばかりが能ではない。広く、深き愛を湛えているのでなくてはならぬ。有情滑稽が、愛に発するは、固よりである。愛に発する洒落、滑稽、諷刺は、更に、広く、深きものとなるであらう。「雨霰雪や氷と隔つれど、落つれば同じ谷川の水」で、出発点は異なっても、帰着点は、一つである。この谷川の水が、谷を出で、岩を潜り、山を繞り、野を横ぎり、天を涵す大河となり、洋々として流るるに至るや、万頃の田園を潤し、許多の人を養う。古来の大文学は、みなかくの如く、愛の源泉より湧き出たればこそ、不朽の生命を持っているのである。川柳も亦、その例に洩れるものではない。今日の川柳が果して、ここに至って居るであらうか。私は、現代の川柳は殆んど読んでいないが、稀に見ることもある。たまに見る作品は、往々にして、その観察が鋭敏を欠き、表現が抽象的で、具体的描写に遠ざかり、措辞拙劣で、その中心が明白でなく、端的でなく、捕捉し難く、さりとて余情長からず、含蓄豊かならず、或は川柳の如く、或は俳句の如く、鳥鼠

の間に往来するもの少からず。深厚なる愛より発したりと見ゆるものは、曉天の星の如し。齒切れよき江戸っ子を地下より喚び起して、この現状を見しめたらば果して、何というであろうか。俳人は、大率、俳書を愛せず。柳家は大概柳書を好まず。聞見広からず。管を以て、天を窺ひ、これを以て天となすに似たり。古人、温故知新を説くは、所以あり。

が、かく言えばとて、古川柳を、そのまま復活せしめよというのではない。文学は時勢の子である。江戸の土地に、江戸の時代精神が宿って、そこから生れ出た川柳であって見れば、今や、時勢は変転し封建の桎梏の下に呻吟していた江戸っ子の息抜きであった諷刺も、すべてが自由な時代の今日となつては、無用の長物と思われるであらう。赤裸々、露堂々と、所思を直指することは、何等の差支は無い。だが、直指のみが、有効な表現というでもない。それのみでは、膚浅に失することもある。真綿で針を包む方が、有効な場合も多い。又、その諷刺も、過去に於ては、弱者に向うことが割に多かつた故に、今後は、真に弱者の味方となつて、縦横に活躍する様にありたい。そして、その措辞も、必ずしも、江戸っ子言葉を使うことは無いが、川柳子が、よく古語、俗語、俗諺、隠語、術語、漢語、仏語、外国語でその情景を描写した様に、舌頭に千転して、句の内容が、よく理解せられ、感情を打つ様にせなくてはならぬ、この当然なことが、中々行われて居ない。文学は、人の感情に訴えることを主眼とするものである。知識や意志に訴える部面もあるが、それは、主眼でない。人の感情に訴えて、印象を深からしめるには、感情を動かすに足るだけの、明瞭、正確、精密な表現、措辞が必要である。そのためには、必死の推敲に俟たねばならぬ、不明瞭、不正確、不精密では、誰が誰に何を、何の爲めに、如何したかが分らない。それでは、感情に訴

える効果が薄い。最近瞥見した作品を見て切に思うのである。十七音の中に、これを合蓄せしめるには、苦心がいはる筈である。感情に訴える表現とは、換言すれば、美的表現である。最近の作例を見ると、ひとりよがりが多くて、美的表現に副わなくても平気である様に見える。これで分らぬなら、分らぬ方が悪いといわんばかりである。これは、俳句でも、和歌でも同様である。白楽天がその作品を無学の老人に聞かせた故実を忘れてはならない。

附 記

余、今夏、花園大学に於て、集注講義に出講中、六月四日、卒中再発、加養匝月、病稍々退く。月末に及んで、帰郷せり。偶々、福島教授喜寿記念論文集編撰の議起る。余も稿を寄せんとするも右手不仁、疲憊憂悶、新に稿を起す能わず。誠に伎養に勝えず。時に篋底をさぐりて旧稿を得たり。その一部を、割いて寄与し責を塞ぐこととせり。是は初学者の為に筆を執りしものにして、本論文集と、等を異にし、本論文集に登載すべき限りのものにあらず。例えば、引用句に、出典を欠くが如き是也。余は大正十四年、京都帝大を出づるや、直に、臨済宗大学教授に就任、昭和十八年、戦争の為職を退き、昭和四十年花園大学創立と共に職に復す。其間、実に二十三年余。生来浅学菲徳、尸衣素餐、僅かに員に備わるのみなりき。その間大過なきを得たるは、福島教授の提撕によるものにして、敬謝に勝えざるところ也。今や馬令七十有四に及び、采薪の憂、ようやく漸み、本学を辞せんとするに当りて、締交以来を合算すれば、五十四春秋、眷恐纏綿の情、言うべきところを知らず。南無合掌。

昭和四十四年九月下浣